ONLY♀IN♂'S

性転換させられた男子校生の日常

1

001　無理矢理トランス

また今日も、人気の無い体育館の裏に連れられている。高校××してまだ一ヶ月ほどしかたっていないのに、小柄ながら人当たりの強いオレは早くもクラスの悪ガキに目をつけられていた。平凡な高校生活を過ごしたいのに。今日もこいつらにかつあげされるのだろう。いや、現金はもうないから、ぼこぼこに殴られるのだろう。オレはまたいつものように後ろ向きな開き直りにふけっていた。クラス一のやんちゃ野郎である茶髪ロンゲ田中がぐいとオレの胸ぐらを掴んだ。こいつさえいなければ、オレはこんなにいじめられることはなかっただろう。こいつは、いつもオレにちょっかいをだしてくるんだ。クラスの中でこの茶髪ロンゲ田中が一番嫌いだ。いや、今まで十×年間生きてきて一番嫌いな人間かもしれない。

「おい、山下。金はあんのかよ。」

「ね、ねーよ」
「なんだと、くすねてでも持ってこいって昨日言っただろうが。」
そう言って、茶髪ロンゲ田中はオレの腹をぶん殴った。一昨日、殴られた痛みがまだ残っているところを再び殴られて、かなり気持ち悪かった。
「田中、まあ待てよ。」
いつもなら、茶髪ロンゲ田中に便乗してオレをいじめてくるコンドーム斉藤が珍しく田中を制した。こいつの財布が膨らんでいるのは、別に札束が入っている訳じゃないんだ。ただ、コンドームが何個も入っているだけなんだ。使う機会なんて無いくせに毎日財布に入れて持ち歩いているんだよ、このコンドーム斉藤は。
「なんだよ斉藤、お前も制裁を加えてやれよ。」
「ふふ、殴るよりもいい制裁がオレにはできるんだな。」
すごく嫌な予感がする。これから、コンドーム斉藤が何をしてくるか予想がつかなかった。かつあげでもなく暴力でもなく何だろう。馬鹿なこいつらに他に思いつく事があるのか。
「なんだよ斉藤、何をする気だよ。」
せっかちな茶髪ロンゲ田中はコンドーム斉藤をせかした。
「なあ、田中。お前、セックスしたくねーか。」
「はあ、何だよ突然。頭おかしいんじゃねーの。」

茶髪ロンゲ田中が珍しくいい事を言う。
「こんな男子校でさ、学内でセックスしたくねーか。」
「保健室の姉御でも襲うのか。」
「違うって、そんな事したら退学だろ。そもそも姉御はおばちゃんだろ。まあ聞いて驚くなよ。実は、実はさ、オレの親父の製薬会社で今とんでもない薬が開発中らしいんだ。そのサンプルをくすねてきたんだよ。ほら、これだよ。」
コンドーム斉藤はだらしない腰パンのポケットから極彩色の怪しげなカプセルを取り出した。
「何の薬なんだよ。」
「おい、話の流れを察しろよ。田中と違って、いじめられっこ山下ちゃんは気づいてるんじゃないの。」
話の流れを察すると、このむさくるしい男子校の学内でセックスできるようになる薬らしい。可能性として考えられることはあったが、まさかそんな訳はないと思った。
「そう、これは性転換薬なのでーす。今から山下にこの薬を投与しまーす。」
まさかそんな訳あった。そんなふざけた薬がこの世の中にあったとは。しかも、事もあろうにコンドーム斉藤なんかが持っているなんて。
「面白そうじゃん、飲ませようぜ。」
茶髪ロンゲ田中は、相変わらず何も考えずにノリだけで言った。全く、その開発中の薬とやらをオレが飲んで死んでしまったらどうする気だよ。第一、女にされてこいつらに犯されるなんて考えたくも

なかった。実際には、そんな薬なんて信じてなかったけど。ただコンドーム斉藤がオレをからかっているだけだと思ったんだ。いずれにせよ、得体の知れないカプセルなんて飲まされるのは嫌だったから、腹の痛みをこらえながらオレは走って逃げ出そうとした。

「おっと、逃げんなよ。」

寸でのところで、あえなくコンドーム斉藤に捕まってしまった。そして、二人がかりで怪しげな新薬を飲まされた。

「やめろ、やめろって。」

必死で嫌がったが徒労に終わった。口に入れられたカプセルを無理矢理に飲まされてしまった。

「さあ、どーなるのやら。山下ちゃんの運命やいかに。本当に女になったらウケるー。」

コンドーム斉藤がふざけた調子で言った。こいつは、ただ楽しんでるだけだ。まさかオレが今から本当に性転換するなんて思ってもないようだ。その様子を見て少し安心した。ただオレを騙してからかっているだけなんだ、コンドーム斉藤は。

「ううっ」

しかし、予想外の展開がオレを待っていた。しばらくして、急に体が熱くなり始めた。意識がもうろうとしてその場に倒れこんだ。憎らしい茶髪ロンゲ田中とコンドーム斉藤の焦る表情がうっすら見えた。今更焦るなよな。

「おい、なんかやばいんじゃねーの」

茶髪ロンゲ田中は逃げる気満々だった。
「大丈夫だって、とりあえず誰かに見つかるとまずいっしょ。倉庫に連れて行こうぜ。」
そう言って、コンドーム斉藤と茶髪ロンゲ田中はオレを倉庫へと運んだ。マットの上に乱暴に転がされたが、感覚が麻痺して痛みは感じなかった。本当に体が熱い。小さい頃にかかったンフルエンザを思い出す。意識が段々遠のいていった。

002　倉庫ミッドナイト

「おい、起きろよ。」
オレは今、頬を軽くビンタされているらしい。段々と意識が戻っていく。茶髪ロンゲ田中とコンドー

ム斉藤の顔と、体育館倉庫の天井が見える。そうか、マットの上に転がされたんだっけ。目を覚まそうと、上半身を起こした。
「いや、驚いたな。」
コンドーム田中が言った。いやいや、驚くのはオレの方だよ。変な薬を飲まされて、意識を失うなんて本当に災難だ。あたりを見回すと薄暗く、どうやらかなりの時間眠っていたらしい。
「今何時なんだよ。」
オレは茶髪ロンゲ田中に問いかけた。そして、自分の声が以前とは違って明らかに甲高いことに驚いた。あれ、喉の調子がおかしいのかな。最初はそう思ったが、まさかと自分の股間と胸を触ってしまった。そして、絶望した。
「本当に女になるなんてな。驚いたよオレも。」
コンドーム斉藤は、にやにやしながら言った。オレは、思わずその場から逃げだしたくなった。
「お前らのせいだぞ、ほんと信じらんねー。」
そう吐き捨てて、倉庫から一目散に逃げ出した。
「おい、待てよ。逃げんじゃねーよ。」
倉庫の入り口から数メートルのところで、あえなく二人に捕まってしまった。そして、倉庫に連れ戻された。
「やめろっ、離せよ。」

もともと力でかなう相手じゃなかったが、あまりに自分が非力で面食らった。全然力が入らない。なされるがままにマットの上に倒された。
「かわいがってやるからな。」
コンドーム斉藤は、乱暴にオレのワイシャツを脱がせた。あらわになった豊満な胸にコンドーム斉藤はしゃぶりついた。
「いやっ、あん。やめろ。いやっ。」
オレは必死に抵抗したが、身動きすらできない。ただただ、されるがままに体をもて遊ばれるしかなかった。さらに悪い事に、茶髪ロンゲ田中がオレのズボンを下着もろとも脱がせた。
「山下お前、おまんこついてるじゃねーか。」
そう言って、茶髪ロンゲ田中はオレの股をまさぐり始めた。自分の体に今まであたものが無く、無かったものがあることを犯されることで知るなんて。茶髪ロンゲ田中は、さっきまでペニスがあった平な恥丘から、ゆっくりと股下にあるクリトリスまで手を運んだ。そして、オレのクリトリスをいやらしい手つきで撫で回した。自分がこいつらなんかに犯されて感じているなんて考えたくもなくて、必死で抵抗した。でも、もうマットの耳を握りしめるくらいしかできなかった。
「いやあっ、あん、やめろ、ああん。」
無情にも喘ぎ声がオレの口から漏れる。それを聞いた茶髪ロンゲ田中と茶髪ロンゲ田中は興奮したらしい。さらに激しくオレの体をむさぼった。茶髪ロンゲ田中はオレの膣の中で、激しく指を揺らせた。

「おまんこは感じるのか、ああ」
「いやっ、あん、あっ」
体中に電気が走るようだった。股を閉じようとしたが、茶髪ロンゲ田中がオレの股に体を入れて阻んだ。オレは無性に屈辱感と恥ずかしさを感じた。このまま犯されるんだと思った。もう、抵抗しようにも力が入らなかった。コンドーム斉藤は、興奮して言った。
「さっさと入れちまおうぜ。」
その時、体育倉庫の外に懐中電灯の光が見えた。物音を聞いて見回りの警備員がやってきたらしい。
「おい、誰かいるのか。」
そう言って、警備員は体育倉庫のドアに迫ってきた。